

古鬼怒湾南岸地域における縄文時後晩期集落の立地と貝層分布

吉野 健一

目 次

1. はじめに	61
(1) 問題の所在	61
(2) 分析方法	63
2. 古鬼怒湾南岸地域における様相	64
(1) 古鬼怒湾湾奥部	64
(2) 印旛沼沿岸	66
(3) 古鬼怒湾南岸湾央部	68
(4) 古鬼怒湾南岸湾口部付近	70
(5) 小結	71
3. 周辺地域との比較	71
(1) 古鬼怒湾北岸地域	72
(2) 小結	75
(3) 東京湾沿岸地域との比較	76
(4) 縄文時代中期における様相との比較	77
4. 地形と貝層分布からみた古鬼怒湾沿岸の縄文時代後・晩期集落	78
(1) 古鬼怒湾沿岸における後・晩期集落の様相	78
(2) 東京湾沿岸地域からみた古鬼怒湾沿岸地域	79
5. おわりに	80

1. はじめに

(1) 問題の所在

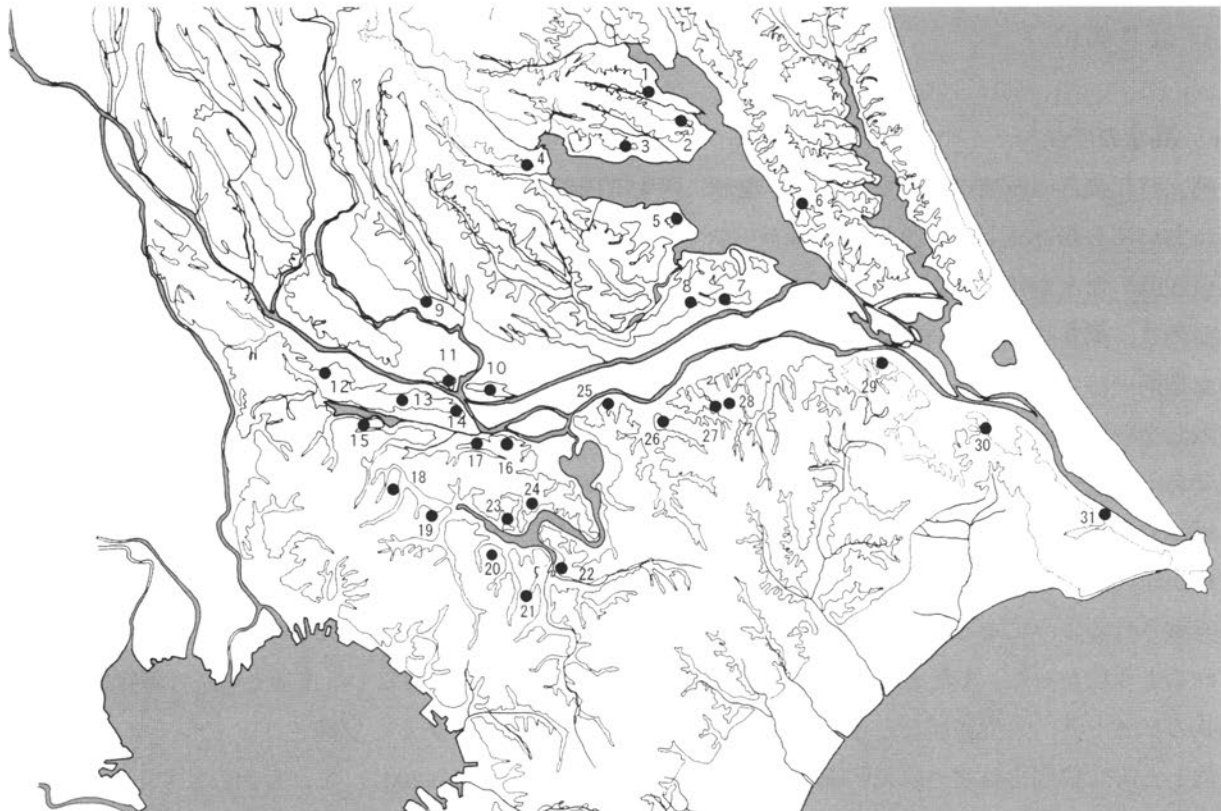
縄文時代集落の研究において、立地や地形に関する問題は、極めて古典的な研究対象でありながら、今日においても繰り返し取り上げられるテーマである。房総半島における研究としては、後藤（1985）、堀越（1995）などが代表的なものとして知られている。これらの論考の中でたびたび問題として取り上げられるのは、環状貝塚の中央にある凹地状の部分に関する議論で、具体的には、これが自然地形なのか人為的な掘削の跡なのかといったといった議論が行われている。堀越（1995）は、下総台地においては遺跡の立地しない皿状凹地を地図上で確認できることなどを根拠として、これらの地形が自然地形に由来するものであると述べたことから、この問題について結論が出たと考えられていた。

近年の江原（1999a）に代表される環状盛土遺構の研究結果から、栃木県小山市寺野東遺跡に類似する遺跡が現江戸川流域から大宮台地そして千葉県側の東京湾沿岸、さらには印旛沼沿岸にまで分布していると認識されるようになると、環状盛土遺構が縄文時代後・晩期集落研究の新たな研究課題として取り上げられるようになった。またそのような中で、縄文時代後晩期の集落を構成する遺構として、環状盛土遺構、環状のピット群、大型住居などとならび、中央凹地が重要な要素であると認識されるようになると、その機能とともに成因も注目された。具体的には、吉野（2000）、小倉（2001）などを代表とするような、盛土遺構を構成する土が、中央凹地を掘削した土に由来するという仮説である。その一方で阿部（2004ほか）は、これらのいわゆる盛り土遺構を持つ縄文時代後・晩期集落を「谷奥型遺丘集落」と呼び、曲輪ノ内貝塚の発掘調査成果を根拠に、先導谷の奥に形成される凹地は自然地形であると結論づけ、堀越（1995）への回帰を促している。現在では、凹地の成因を明確にするためのより実証的な調査・研究が求められている状況である。

このような研究の動向を見てゆく中で、縄文時代後・晩期集落は、中央凹地を中心として環状盛土遺構のような土手状の高まりが巡ったり、環状に貝層が巡ったり、あるいは住居跡やピット群が巡るというイメージが定着しつつあることが注目される。しかし、特に阿部（2004ほか）が示すように、縄文時代後・晩期集落の多くが谷奥の凹地を囲むように形成されているのか、あるいは本当に凹地を取り囲むように環状に盛土遺構や貝層が分布するのか、といった根本的な問題には、これまでの研究においてはあまり触れられておらず、まずそこから検証する必要があるといえる。

以上のようなことから、本稿では、「中央凹地を中心として遺構を配置する集落」が、はたして一様に同じような地形に占地し、同様な景観を形成しているのかという、最も初歩的な点を検証することにする。今回は、広範囲に発掘調査が行われていない遺跡を含めて、集落における中央広場と見なされる凹地の位置および周辺地形に着目しながら、古鬼怒湾沿岸の印旛沼周辺および利根川南岸地域を中心に、縄文時代後晩期集落が占地する地形について検討を行うこととする。

この地域を対象として選択した主な理由は、（1）近年、井野長割遺跡の盛土遺構や遠部台遺跡、江原台遺跡の土器塚など後晩期遺跡の特徴とされる遺構が多く検出されている地域であること、（2）印旛沼沿岸は東京湾沿岸地域とならび縄文時代後晩期遺跡の密集地であり、貝塚における貝層の分布状況などからみて東京湾沿岸地域とは異なった様相が見られること、（3）開発による破壊が進行しつつあるものの、



- 1 安食平貝塚 2 岩坪貝塚 3 平三坊貝塚 4 上高津貝塚 5 陸平貝塚 6 麻生堀之内貝塚
 7 福田貝塚 8 椎塚貝塚 9 東栗山貝塚 10 北方貝塚 11 中妻貝塚 12 城山貝塚 13 下ヶ戸貝塚
 14 古戸貝塚 15 馬場貝塚 16 岩井貝塚 17 天神台 18 佐山貝塚 19 神野貝塚 20 井野長割遺跡
 21 曲輪之内貝塚 22 台方花輪貝塚 23 石神台貝塚 24 戸ノ内貝塚 25 興津貝塚 26 荒海貝塚
 27 古原貝塚 28 奈土貝塚 29 大倉南貝塚 30 良文貝塚 31 余山貝塚

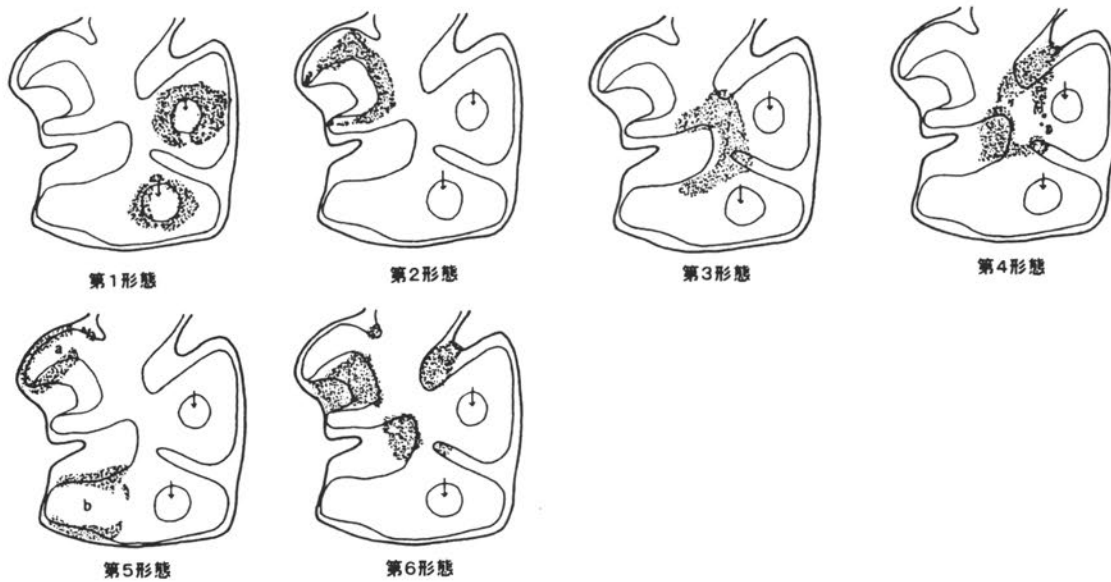
第1図 古鬼怒湾の縄文後・晩期貝塚の分布

多くの遺跡が畑地となっており、現況で遺跡の景観や遺物や貝層の分布が観察できる遺跡が多いことの3点である。特に(1)は、房総半島を含めた関東地方の縄文時代後晩期の遺跡を検討する上で欠くことのできない地域的な個性であると考えられ、極めて重要であると考えられる。

また検討に際しては、本地域の様相を明確にするために、隣接する霞ヶ浦沿岸を中心とする古鬼怒湾南岸地域東京湾沿岸地域、東京湾東岸地域についても触れ、3地域の比較を行うこととした。

なお今回の検討は、前述したような、中央凹地が自然に形成されたものなのか、人為的な掘削なのかといった議論は行わない。「自然現象か人為掘削か」という問題は、全ての遺跡で、あるいは個々の遺跡においても、一元的なありかたではないと私は考えている。つまり、ほとんど自然地形のままである場合から、自然地形を利用しながら土地を利用する過程で改変を行う場合、さらにはほとんどが人為的な掘削である場合まで存在すると考えられるので、個別の分析が必要であると考えている。

同様に、環状盛土遺構のようなマウンド状の高まりやドーナツ状の高まり、あるいは斜面の土砂の堆積についても、人為的な盛土か否かといった議論も行わない。



第2図 地形と貝層分布の関係からみた環状貝塚形態パターン（日暮ほか2004より引用）

(2) 分析方法

発掘が行われていない集落跡において遺構の配置などの具体的な集落の構造を再現するのは困難である。しかし当該地域においては幸いなことに、貝層、マウンド状の高まり、あるいはドーナツ状の高まりといったような、発掘を行わずとも確認できるような遺構や地形が存在しており、特に今回のような集落の占地を検討する際には極めて有効な指標となる。また貝層を持つ遺跡は印旛沼沿岸のみならず、霞ヶ浦沿岸および利根川流域あるいは東京湾沿岸に多く分布していることから、地域ごとの比較を行うためには恰好の資料であると考えられる。

貝層の分布から集落論を展開する手法は、堀越（1995）などを初めとしてすでに繰り返行われている古典的な手法である。しかし地形と貝層の位置を地域内において網羅的に分析した研究は近年行われておらず、先に述べたような、今日問題となっている縄文時代後晩期集落論を展開するための基礎作業として改めて行う必要があると考えている。このような理由から今回は、地形と貝層の分布を主な切り口として、そこにマウンド状の高まりやドーナツ状の高まり、土器片が密に分布する地点など、地表面で観察できる遺跡の特徴を加味しながら、遺跡のそれぞれの特徴を明確にし、それらを比較することで、地域的な特徴を見いだしてゆくこととする。

今回、貝層の分布と地形の関係について分析を行うにあたって、遺跡を分類し記述する基準として日暮（1999）に示された環状貝塚の分類法を用いることとする。この手法は、平面形での貝層の分布が環状である貝塚を全て「環状貝塚」として定義した上で、占地する地形と貝層が分布する位置から環状貝塚を第1形態から第6形態に分類したもので、それぞれの形態ごとに貝層の粗密によって環状貝塚であるか点列環状貝塚であるかをさらに細分するのである。

環状貝塚の第1形態から第6形態の区分は、以下のような基準で分類する（第2図）。

- 第1形態：窪地の周囲がすべて高い、皿状凹地の堤状部を中心に貝層が形成された貝塚。
第2形態：地滑りによる箱形地形や先導谷を取り巻く堤状部を中心に貝層が形成された貝塚。
第3形態：谷頭が集中し、痩せ尾根状となった台地の高所（分水嶺）を中心に貝層が形成された貝塚。
第4形態：谷頭が集中し、星状を呈する台地の谷頭部を中心に貝層が形成された貝塚。
第5形態：丘陵状の地形や舌状台地の縁辺や斜面に貝層が形成された貝塚。
第6形態：谷頭を中心として、台地斜面に貝層が形成された貝塚。

よって、「第2形態の点列環状貝塚」といったように、貝塚の形態を呼称するのである。

この手法は、佐藤（2000）でも指摘されているように、環状貝塚のみを分析対象としているため、環状貝塚が少ない古鬼怒湾の茨城県側においては必ずしも有効な手法とはいえないが、本稿の目的はあくまでも、中央広場と呼ばれる凹地と貝層その他の遺構の関係についてその地形的な特徴から分析する所にあるため、有効であると判断し用いることにした。

2. 古鬼怒湾南岸地域における様相

古鬼怒湾は、現在の北浦、西浦（霞ヶ浦）、現利根川、鬼怒川、手賀沼、印旛沼などの小地域に区分される。今回主として取り扱う古鬼怒湾南岸地域は、現利根川流域、手賀沼沿岸、印旛沼沿岸に区分されるが、本稿においては、論を進める上で、印旛沼開口部より上流の現利根川流域、印旛沼沿岸、印旛沼開口部より下流の現利根川流域、そして現利根川の比較的河口に近い地域の4地域に区分することにし、それぞれ、（1）古鬼怒湾奥部、（2）印旛沼沿岸、（3）古鬼怒湾南岸湾央部、（4）古鬼怒湾南岸湾口部付近と呼称することにする（第1図）。

（1）古鬼怒湾奥部（第3図）

1）城山貝塚

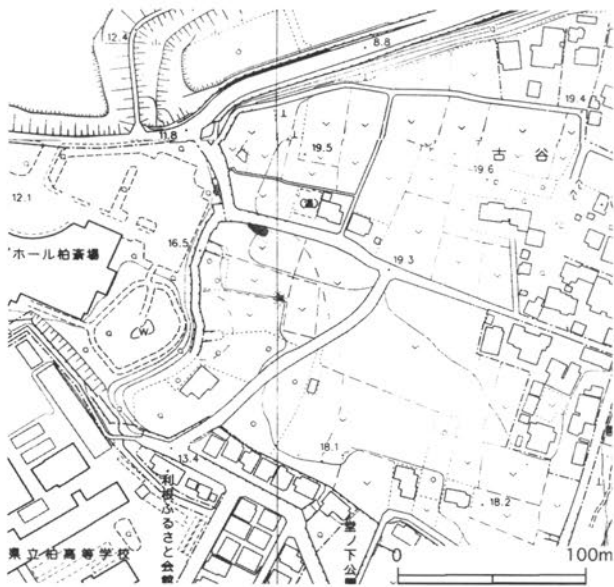
利根川南岸の東西に延びる台地の西側の端部に位置している。標高は約19mである。遺跡の西端は斎場の建設により破壊されており、現状では確認できないが、東側は良好な状況で確認できる。現存部分の西側に凹地状の地形が確認できることから、それをとりかこみ地点貝層が分布していた点列環状貝塚であったと推測される。斎場と遺跡との比高差は約5mあることから、斎場は谷を広げて建設されたと見られ、遺跡は第2形態の環状貝塚であった可能性が高い。貝層が存在するあたりは明瞭な高まりとはならず、平坦な地形が凹地に向かってゆるやかに傾斜する落ち際に近い。

2）下ヶ戸貝塚

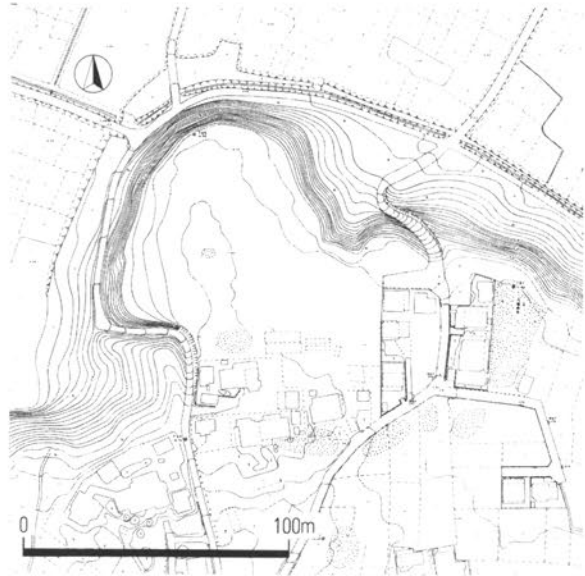
平坦な台地上に位置する。貝層は北側に開口するように緩やかに弧を描き、弧の中央はやや凹地状となり、北側から入り込む谷の谷頭に面し開口する。発掘調査が行われており、縄文時代晩期を中心とした住居跡が検出されている。

3）古戸貝塚、岩井貝塚、馬場貝塚

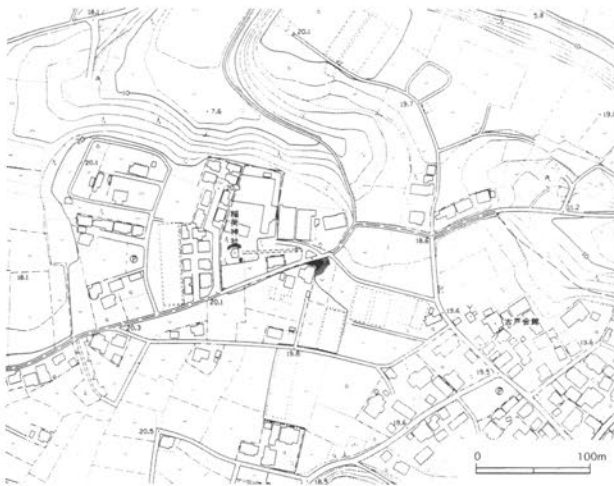
いずれも小規模な地点貝塚によって構成されている遺跡である。しかし貝層の規模と比較して遺物が散布する範囲は広く、遺跡規模は小さくはない。いずれも貝層周辺には谷が入り込んでおり、谷と貝層、遺



1. 城山貝塚



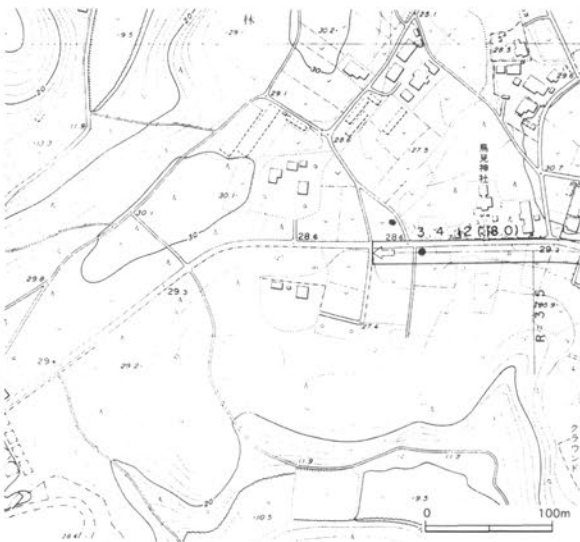
2. 下ヶ戸貝塚



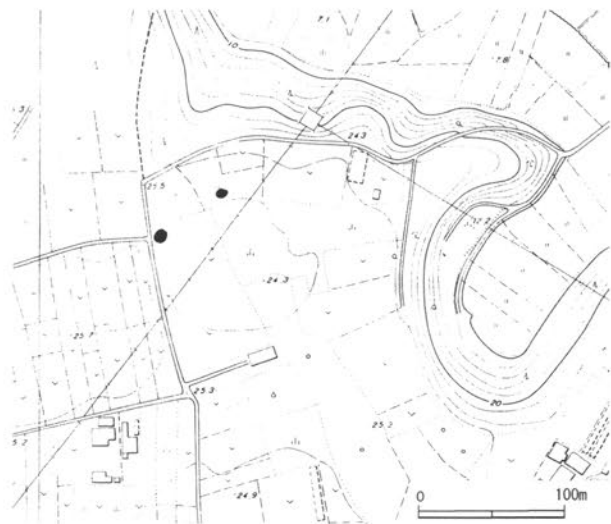
3. 古戸貝塚



4. 岩井貝塚



5. 馬場貝塚



6. 天神台貝塚

第3図 古鬼怒湾南岸湾奥部の貝塚 (2:財団法人千葉県史料研究財団2000より引用)

物散布位置との関連が注目される。明瞭な環状貝塚とは認識できず、凹地を取り囲むようなドーナツ状の高まりも認識できないことから、現地表面から集落の様相を考察することは難しい。これらは比較的大規模な集落であっても、必ずしも地表面においていわゆる環状構造が観察できない遺跡といえる。

4) 天神台貝塚

標高25mの台地上に位置している。掘り鉢状ともいふべき凹地状地形の周辺に地点貝層が数カ所確認される。滝口(1961)においては貝層が7カ所確認されているが、現在地表面では、2カ所が確認されたのみである。凹地は掘鉢状となり、東側から入り込む谷の谷頭に開口している。貝層は凹地を巡るように分布するものの、貝層やその周辺には高まりは見られず、貝層は、平坦部から凹地へ向かう斜面との地形変換点に分布している。

(2) 印旛沼沿岸(第4図、第5図)

古鬼怒湾の南岸に位置する印旛沼沿岸からは、7遺跡を取り上げた。縄文時代後晩期においては大規模な集落跡が多く形成される地域ではあるが、貝層の規模はそれほど大きくはないのが特徴である。

1) 佐山貝塚

印旛沼沿岸の貝塚で、最も奥部に位置する貝塚の一つである。標高約20mの台地上に位置している点列環状貝塚で、北西側から入り込む谷の谷頭に向かって開口していることから、第2形態の環状貝塚に分類される。印旛沼沿岸の貝塚の中では比較的貝層規模が大きい。熱田神社の東側に位置する貝層は、マウンド状の高まりが見られる。

2) 神野貝塚

佐山貝塚の対岸に位置しており、やはり湾奥部の貝塚といえる。標高約20mの台地上に位置する点列環状貝塚で、北東側から入り込む谷の谷頭に凹地が開口していることから、第2形態の点列環状貝塚に分類される。現地表面からの観察では、著しい高まりなどは見られない。

3) 井野長割遺跡

標高約27mの台地上に位置している。貝層は斜面から地点貝層が検出されている。マウンド状の高まりが消失しているものも含めて7基以上検出されており、それらが中央凹地を中心として環状に巡っていることが確認されている(印旛郡市文化財センター2004)。東側の斜面から入り込む谷に面していることが明らかとなっており、凹地は谷頭に開口していることから、第2形態の環状貝塚と同様の平面形をとるといえる。

4) 曲輪之内貝塚

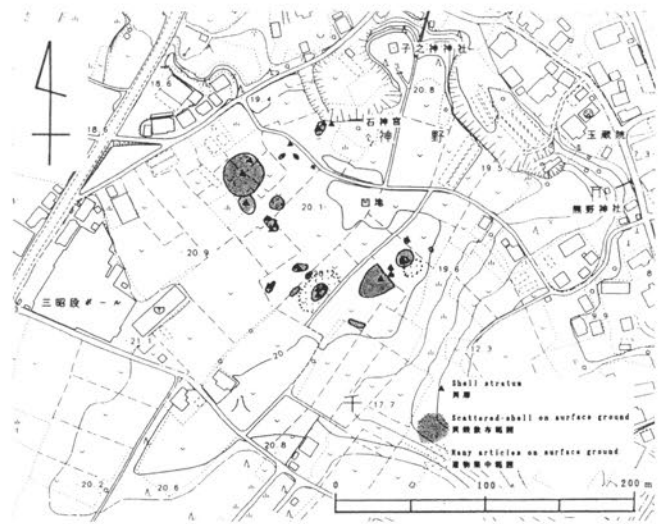
印旛沼南岸の標高約27mの台地上に位置する点列環状貝塚である。北西側から入り込む谷の谷頭に凹地は開口しており、第2形態の点列環状貝塚に分類される。地形全体が北西側に緩く傾斜している。貝層の中で最も東側に位置する地点は、現地での観察ではマウンド状に高まっているように見える。

5) 台方花輪貝塚

曲輪之内貝塚の対岸の台地上及び斜面に貝層は位置している。台地上は現在では宅地となっているか所が多く、詳細な地形を把握することは難しい。台地上には3地点の地点貝塚が見られるが、いわゆる凹地を中心とした分布にはならないように見える。



1. 佐山貝塚



2. 神野貝塚

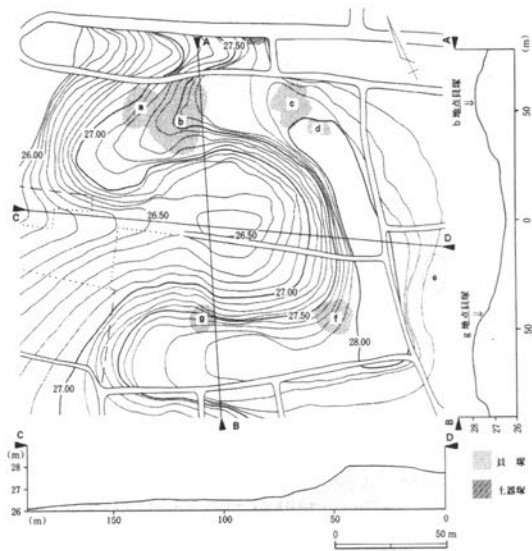


3. 井野長割遺跡

第4図 印旛沼沿岸の貝塚(1) (1:常松1999, 2:常松1997, 3:財団法人印旛郡市文化財センター2004より引用)

6) 石神台貝塚

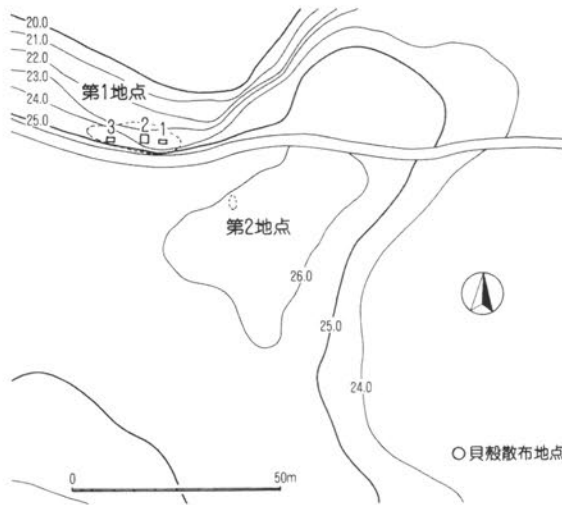
印旛沼北岸の標高約26mの台地上及び斜面に貝層は位置している。斜面に位置する第1貝層は比較的規模が大きく、台地上の第2貝層は小規模である。台地上の平坦面には遺物の散布が見られ、地点により密度は著しい。現状では荒れ地となっているか所が多く、地形と遺物分布の関係を把握するのは難しいが、少なくとも、曲輪ノ内貝塚と同様の形態の点列環状貝塚にはならない可能性が高い。



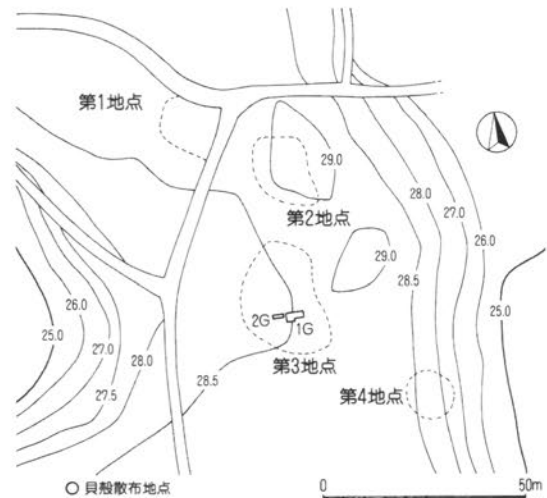
4. 曲輪之内貝塚



5. 台方花輪貝塚



6. 石神台貝塚



7. 戸ノ内貝塚

第5図 印旛沼沿岸の貝塚(2) (4:阿部ほか2004, 5:小川1978, 6・7:財団法人千葉県史料研究財団2000より引用)

7) 戸ノ内貝塚

印旛沼北岸の西側と東側から谷が入り込む痩せ尾根状の標高約29mの台地上に位置している。平面形は環状貝塚とはならず、貝層は台地の高い地点と斜面肩部に位置している。貝層の第2地点は、マウンド状の高まりが見られる。遺物の散布は貝層周辺一帯で著しい。

(3) 古鬼怒湾南岸湾中央部 (第6図)

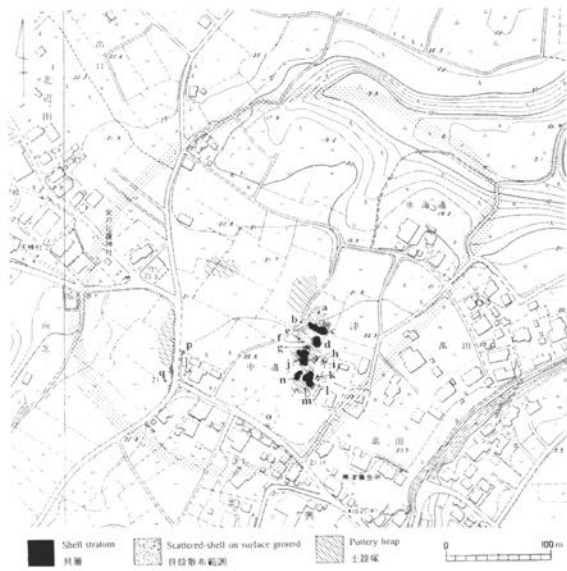
1) 興津貝塚

標高約22mの台地上に位置している。貝層は南北約70m×東西約25mの範囲に14地点の地点貝層が帯状に集中している。貝層の分布は偏りが見られるが、貝層とあわせて土器が集中する地点が環状に巡って

る様子が地表面から確認でき、その中心は、比高差は小さいものの凹地状となっている。遺跡全体の地形は北から南へ向かって緩やかに傾斜しているが、凹地が明瞭な谷に開口するといった状況ではない。第1形態の点列環状貝塚に近いが、典型的なあり方ではない。

2) 荒海貝塚

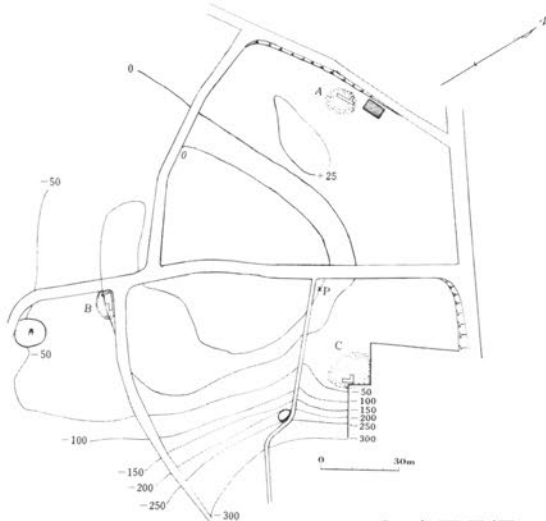
南北に延びる痩せ尾根状の台地の先端に位置する。貝層は尾根を横切るような東西方向に延びる帯状の貝層と、その他に台地縁辺付近にいくつかの地点貝層が観察される。貝層分布の平面形は環状となっており、その中央には緩やかな凹地となっている。台地には西側から谷が入り込んでおり、帯状の貝層は谷頭にかかっている。この谷に凹地が接していることから、第2形態の環状貝塚に近いが、印旛沼沿岸の貝塚と比較すると様相が異なっている。



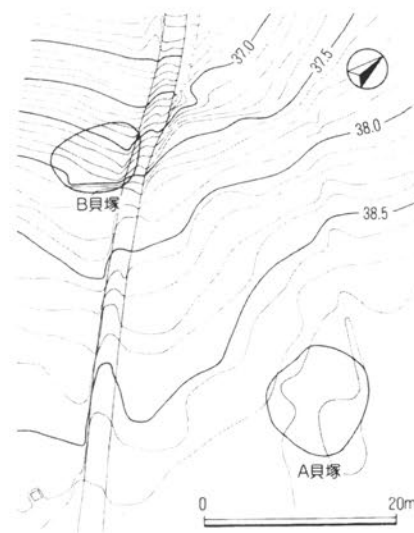
1. 興津貝塚



2. 荒海貝塚



3. 古原貝塚



4. 奈土貝塚

第6図 古鬼怒湾南岸湾央部の貝塚 (1:山田ほか2003, 2:西村1984c, 3:西村1984b, 4:財団法人千葉県史料研究財団2000より引用)

3) 古原貝塚

平坦な台地上に3地点の貝層が分布している。環状にめぐるようにも見えるが、明瞭な凹地は地表面からは観察されず、台地に入り込む谷との関係も明瞭ではない。

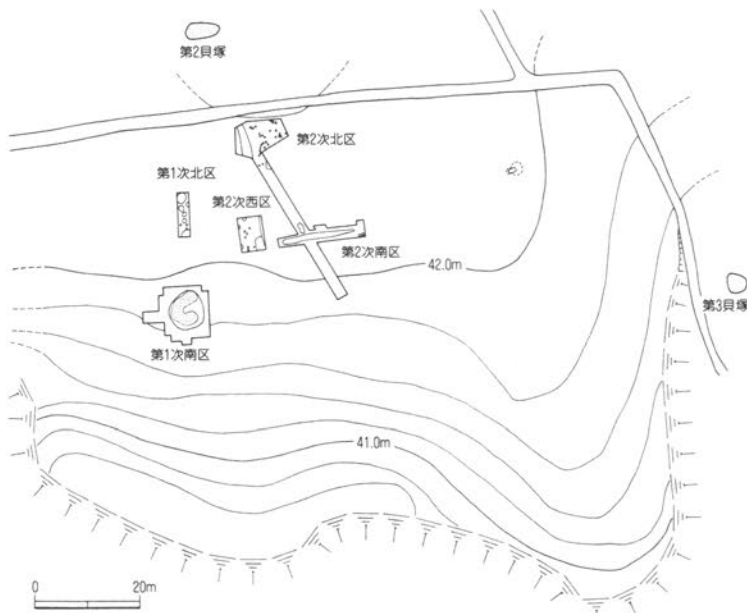
4) 奈土貝塚

北西に傾斜する標高約37mの緩斜面に貝層は位置する。貝層は2地点存在している。

(4) 古鬼怒湾南岸湾口部付近 (第7図)

5) 清水堆遺跡

標高約42mの台地上から緩斜面に地点貝層および遺構が分布している。南側から谷が入り込んでいるように見えるが、谷頭と貝層、遺構の分布には、印旛沼南岸地域に見られる明瞭な関係性は見られない。



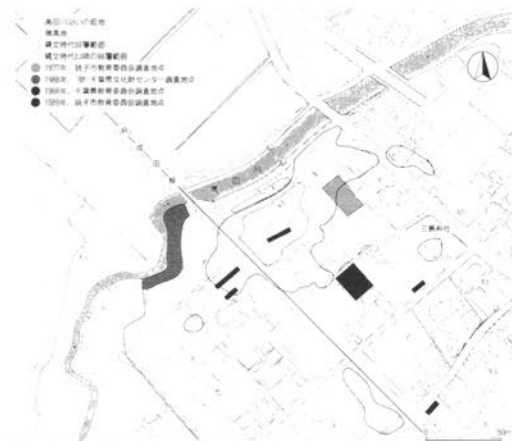
5. 清水堆遺跡



6. 大倉南貝塚



7. 良文貝塚



8. 余山貝塚

第7図 古鬼怒湾南岸湾口部付近の貝塚 (5・7・8:財団法人千葉県史料研究財団2000, 6:西村1984aより引用)

6) 大倉貝塚

南側と東側、西側から谷が入り込む台地上および谷頭のから斜面に貝層が分布する。西村（1983）には4地点の貝層と土器散布範囲が記録されている。台地上にも貝層が分布することから、第4形態に分類されるものと考えられる。

7) 良文貝塚

樹枝状に入り込んだ谷に面する台地の肩部から斜面と崖下に比較的大規模な貝層が分布する。台地上にはほとんど貝層が広がらないことから、第6形態の環状貝塚に分類される。

8) 余山貝塚

高田川東岸の低地に位置する貝塚で、標高7mの微高地に貝層が分布する。現在では住宅が建ち込んでいるため現地で微地形を把握することは難しい。環状貝塚の分類の範疇におさめることが困難である。

(5) 小結

これまで当地域の集落遺跡を概観してきた結果、以下のような傾向が認められた。

- 1) 環状貝塚を形成する遺跡と、貝層分布の平面形態が環状とならず、地点貝層が点在する遺跡が存在する。
- 2) 環状貝塚については、加曾利貝塚を例にとるような大規模な環状貝塚はほとんど見られず、点列環状貝塚となる遺跡が多い。
- 3) 湾奥部から印旛沼沿岸における環状貝塚の多くが、第2形態の点列環状貝塚である。
- 4) 湾奥部の第2形態の点列環状貝塚は、貝層周辺に高まりが確認できない。
- 5) 印旛沼沿岸においては、マウンド状の高まりがある遺跡が分布する。
- 6) 印旛沼湾口部より東側の地域では、谷と貝層分布の関係が明瞭ではなく、典型的な第2形態の点列環状貝塚とはならず、また凹地が明瞭ではない。
- 7) 古鬼怒湾の湾口部近くには、大倉南貝塚や良文貝塚のような斜面に貝層を形成する遺跡が存在する。

これらの様相の中で、特に環状貝塚と中央凹地との関係に主眼を置いてみると、湾奥部から印旛沼沿岸にかけては、先導谷に凹地が連続する、第2形態の点列環状貝塚が多いことが特徴としてあげられる。しかもこの中で、凹地の周辺がドーナツ状の高まりとなる遺跡は印旛沼沿岸に多く、湾奥部では見られない。また印旛沼湾口部から東側の古鬼怒湾湾央部には凹地自体が明瞭ではない遺跡が多いことから、谷と凹地の関係が明瞭な第2形態の環状貝塚の分布は限定されるといえる。

またその一方で、古鬼怒湾湾口部付近においては、斜面に貝層を持つ遺跡も見られ、印旛沼沿岸や古鬼怒湾湾奥部とは異なった様相が見られた。

3. 周辺地域との比較

前章において古鬼怒湾南岸地域の地形と貝層などの分布について検討を行ってきた。その結果、この地域内における小地域ごとの違いや特徴が見られることが明らかになった。当地域は、古鬼怒湾北岸地域や

東京湾沿岸地域と隣接していることや、縄文時代中期から遺跡が連続して営まれていることから、前章であげた小地域における特徴や違いは、隣接する地域や前の時期との比較を通してより明確になるものと考えられる。

そこで本章においては、隣接する古鬼怒湾北岸地域や東京湾沿岸地域の様相、あるいは縄文時代中期における様相と比較することで、当地域の特徴をより明確にすることとする。

(1) 古鬼怒湾北岸地域 (第8図, 第9図)

古鬼怒湾北岸地域は、おおまかに霞ヶ浦沿岸、古鬼怒湾湾奥北岸地域に区分される。以下に示した遺跡の中で1)～9)が霞ヶ浦沿岸、10)～12)が古鬼怒湾湾奥北岸地域である。この地域には小規模な貝層が点在するような遺跡も多く知られているが、今回はとりあげず、代表的なもののみを扱うこととした。

1) 安食平貝塚

標高約25mの台地上に位置する。貝層は2つのまとまりに区分され、一つは南側から入り込む谷に面した台地縁辺の列をなす地点貝塚、もう一つは台地中央のクランク状に分布する貝層のまとまりで、台地中央の貝層の規模の方が大きい。台地中央の貝層は、南側の谷の谷頭に開口する第2形態の環状貝塚に近いが、印旛沼沿岸に分布する第2形態のものとは様相を異にする。

2) 岩坪貝塚

台地縁辺の肩部から緩やかな斜面に向かって大規模な貝層が形成されている。貝層が形成された時期は加曽利E式期から加曽利B式期であるが、加曽利B式期のものが最も規模が大きい。貝層の位置から見ると第5形態もしくは第6形態に属するが、貝層の分布は環状とはならない。

3) 平三坊貝塚

標高約25mの台地上に貝層は分布する。貝層分布の平面形は北西に開口する環状貝塚となり、地形は南西に緩やかに傾斜しているが、明瞭な凹地状地形は見られない。南側から入り込む谷に面しているものの、第2形態や第3形態の環状貝塚のような谷と貝層分布との関連は見られない。谷頭に分布した地点貝層は、加曽利E式期のもので、台地上の比較的大規模な貝層が後期以降のものである。

4) 上高津貝塚

標高約26mの台地上に位置する。遺跡の周辺から谷が集まっている地形で、貝層は谷頭から斜面にかけて分布することから、第3形態の貝塚環状貝塚に分類される。遺跡は加曽利E式期から晩期に属しており、中央の凹地は南東側に開口している。

5) 陸平貝塚

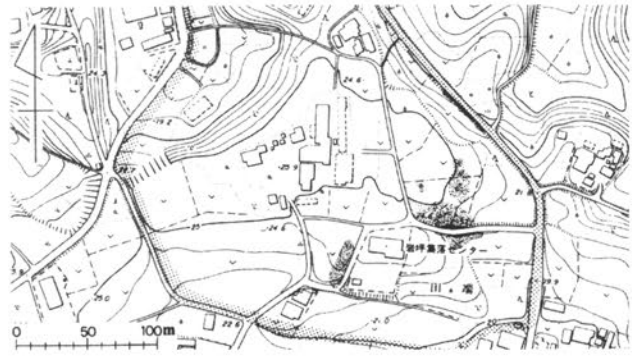
周辺を谷に囲まれた、東西にやや長い台地に位置する。貝層は谷頭から斜面に分布しており、第6形態の環状貝塚であるといえる。台地中央には現状では凹地は確認できず、むしろやや高まりとなっている。遺跡の時期は中期が主であるが、後期までつづく貝塚である。

6) 福田貝塚

標高約27mの平坦な台地上に位置する。貝層は4地点に分布している。西側の2地点は谷頭に位置しているのに対し、東側の最も大きな地点は東側から入り込んだ谷の谷頭に近い台地の最も高い地点にあり、南側の地点は台地縁辺から遠い、高い地点に位置している。西側に開口する第2形態の点列環状貝塚の可



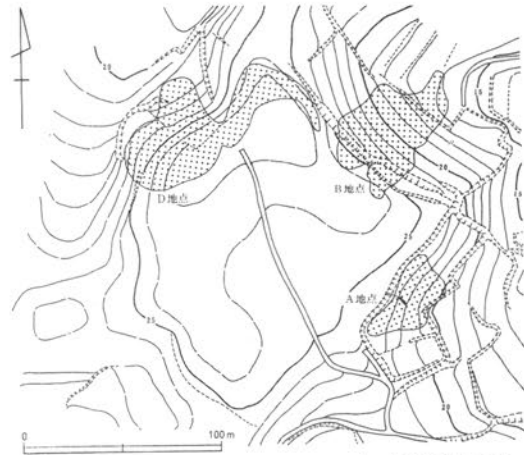
1. 安食平貝塚



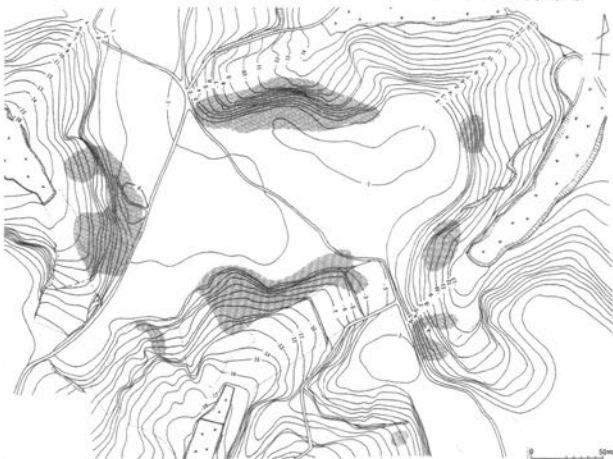
2. 岩坪貝塚



3. 平三坊貝塚



4. 上高津貝塚



5. 陸平貝塚



6. 福田貝塚

第8図 古鬼怒湾北岸の貝塚 (1) (1・2:佐藤2000, 3:佐藤ほか2001, 4:土浦市教育委員会1994, 5・6:茨城県1979より引用)



8. 椎塚貝塚



9. 麻生堀之内貝塚



10. 東栗山貝塚



12. 中妻貝塚



11. 北方貝塚

第9図 古鬼怒湾北岸の貝塚(2) (8:茨城県1979, 9:吉野ほか2002, 10・11:佐藤2000, 12:茨城県1979より引用)

能性があるが、検討の余地を残す。

8) 椎塚貝塚

標高約27mの痩せ尾根状の丘陵に位置している。貝層は丘陵周辺の斜面に分布しており、第5形態の環状貝塚である。

9) 麻生堀之内貝塚

標高約35mの北西から南東にやや長い台地上に位置している。貝層は台地上面の平坦部に分布しており、最も規模の大きなA貝層以外は、いずれもブロック状の小さな貝層である。A貝層の西側に凹地状の地点が見られ、そこを取り囲むように貝層が分布しているようにも見えるが、それに規制されない貝層も見られることや、A貝層の南東側にも凹地が見られ、平面的な貝層の分布も環状貝塚とは呼びがたい。

10) 東栗山貝塚

標高約20mから22mの台地上に位置している。東西約300mにわたる広い範囲に貝層の分布がみられ、その分布の傾向は様々である。個別にみると図の西側に見られる環状に貝殻が散布する地点は第2形態の環状貝塚のように見える。この地点は後期から晩期に属するものと見られる。それに対し、図中央の道路に面した地点や東側のやや大きな貝殻散布地点は、尾根痩せ尾根の最も高い地点に位置している。その他にも北側から入り込んできた谷の谷頭にも地点貝層が見られる。これらの貝層は中期のものが主で、最も新しいもので堀之内式期のものである。

11) 北方貝塚

標高約26mの台地上に位置している。西側から入り込む緩い谷に向かって開口する第2形態の環状貝塚である。貝層の時期は堀之内式期のものが多い。

12) 中妻貝塚

標高約23mの台地上に位置している。貝層は環状に巡り、西側に開口部を持つ。凹地状地形は北西側から入り込む谷に面し開口していることから、第2形態の環状貝塚であるといえる。貝層は堀之内式から加曾利B式期のものが多く、晩期まで続く。

(2) 小結

以上のように、古鬼怒湾北岸の後・晩期集落の状況を概観した結果、以下のような傾向がみられた。

- 1) 霞ヶ浦沿岸の貝塚には、典型的な環状貝塚は少ない。
- 2) 霞ヶ浦沿岸においては、斜面に貝層が形成される第5形態、第6形態の貝塚が分布している。
- 3) 中期から貝層が形成される遺跡においては、中期と後期では貝層の分布状況が異なる例が見られる。
- 4) 古鬼怒湾北岸湾奥においては第2形態に属する環状貝塚が分布する。

古鬼怒湾南岸地域と比較すると、いくつかの共通点と相違点が見られる。その中で最も共通する点として注目されるのは、4)の、第2形態の環状貝塚が目立つ点であろう。この地域の第2形態の環状貝塚は、特に印旛沼沿岸地域に隣接している地域に多く見られる傾向がある。次に2)に示した斜面に貝層を持つ遺跡が存在するという点も共通点として捕らえられる。しかしその一方で、中期の貝層と後期の貝層が、東栗山貝塚のように明瞭に分布状況の違いとして現れるような遺跡は、古鬼怒湾南岸地域には見られない。また明確に環状貝塚とはならない遺跡が、比較的大規模な貝層を持つ遺跡に多い点も、この地域の特徴といえる。また貝層以外の要素で、印旛沼沿岸に特徴的に見られるマウンド状の高まりについては、現時点

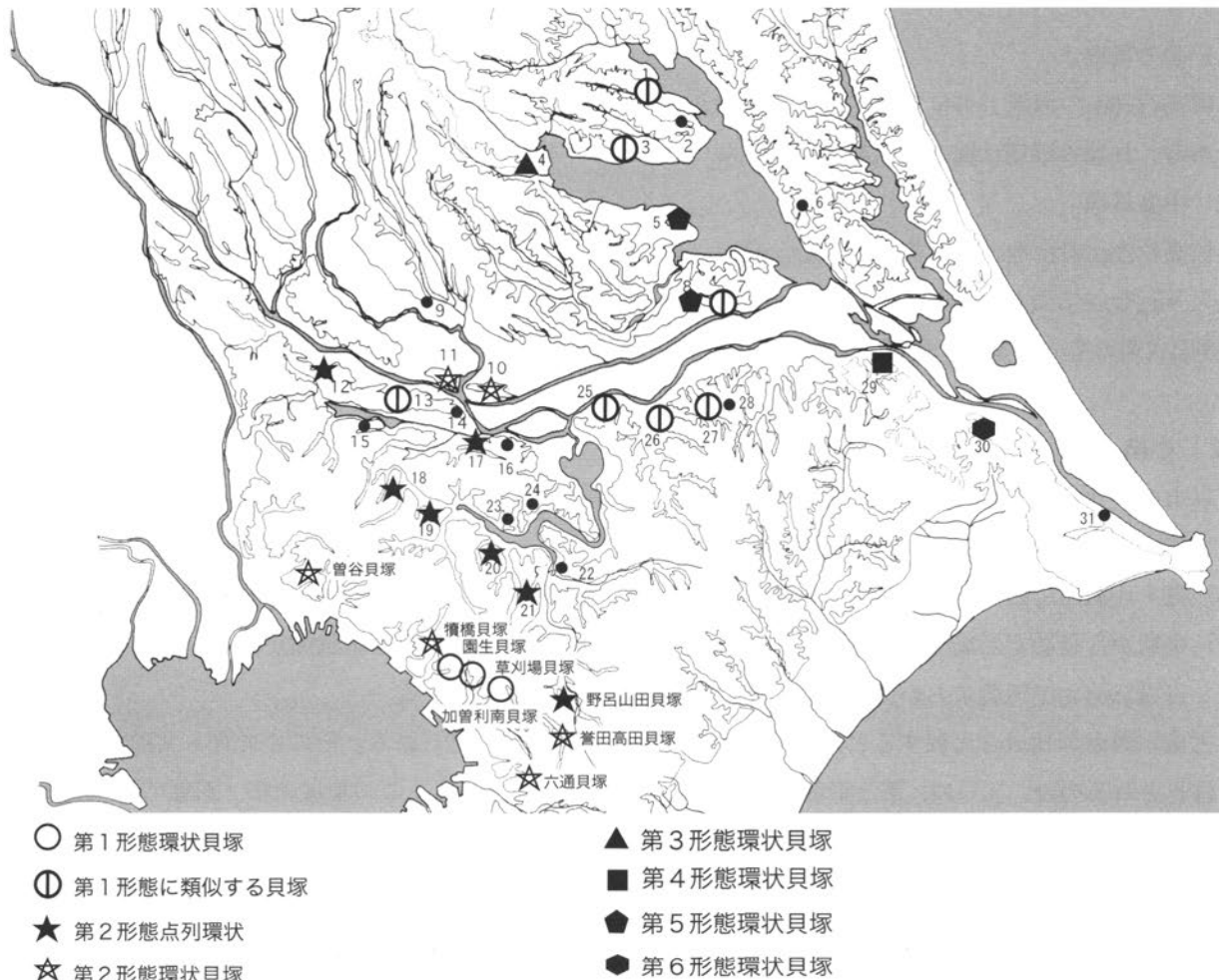
においては明確なものは確認できなかった。

(3) 東京湾沿岸地域との比較

東京湾沿岸地域の環状貝塚についての分析は、日暮（2004）にすでに提示されているので、それを参照した。ここでは、分析対象は千葉市周辺に限られ、かつ遺跡ごとの詳細な検討や時期的な違いについて明記はしていないものの、本稿での比較対象としては十分であると考え、縄文時代後・晩期に属する例を選択して用いることとした（第10図）。

第1形態の貝塚を見ると、都川、葭川流域に集中する傾向にある。後晩期の遺跡として代表的なものに、草刈場貝塚、加曾利南貝塚などがある。それに対し、第2形態の貝塚は、都川水系の河川上流域に見られ、誉田高田貝塚などがそれにあたる。都川に近接する印旛沼水系の鹿島川流域に位置する野呂山田貝塚も第2形態の貝塚である。これらの貝塚よりも南側に位置する東南部丘陵を見ると、多くが第4形態の貝塚に分類される。

このように千葉市周辺の環状貝塚を概観したところ、第1形態の貝塚が都川流域に位置し、その周辺地域に第2形態、第4形態の貝塚が分布しているということができよう。また、前章までで、印旛沼沿岸に多い形態として取り上げてきた第2形態の環状貝塚は、分布が都川水系上流域から鹿島川流域へと



第10図 縄文時代後・晩期の古鬼怒湾沿岸における環状貝塚の形態形態別分布（一部日暮ほか2004を参照）

つながっており、印旛沼沿岸へと連続する様子を伺うことができる。

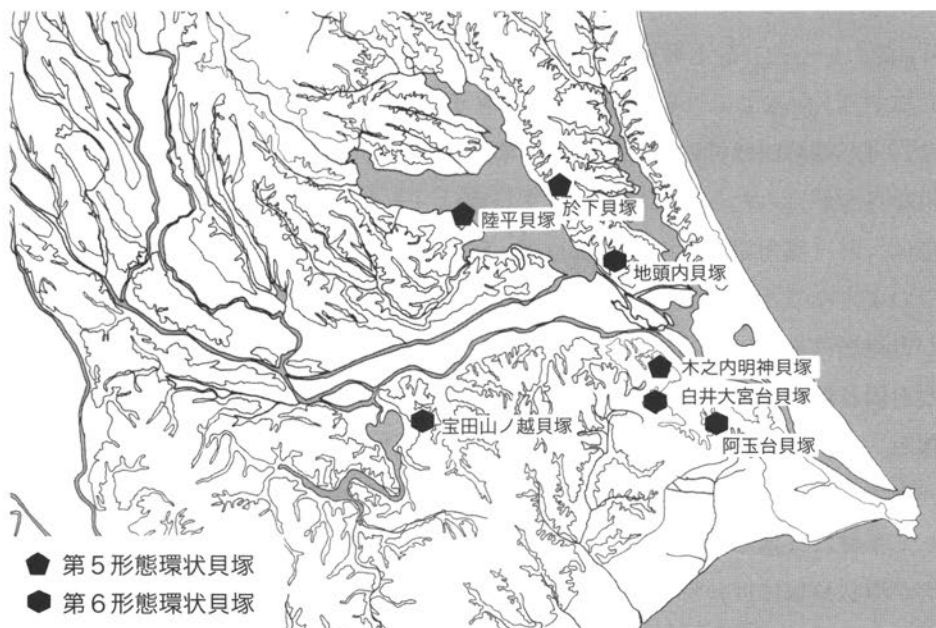
以上のようなことから、第2形態の点列環状貝塚が主体となるというありかたは、東京湾沿岸の千葉市周辺の遺跡から見た場合、必ずしも一般的ではなく、印旛沼沿岸地域の特徴であるということができる。

一方、印旛沼沿岸地域で見られるマウンド状の高まりについては、東京湾沿岸においては、明確な報告例は見られない。しかし吉野（2004）で指摘したように、加曽利南貝塚において、住居跡のような掘り込みを褐色土で埋めたような痕跡が見られ、高く盛り上がっている様子が報告されていることや、環状貝塚の貝層部が部分的に高まっている状況などが確認されることを見ると、東京湾沿岸においても少なからず存在するものと考えられる。また、ドーナツ状の高まりについても、第1形態、第2形態とした貝塚の多くが、中央凹地との比高差が顕著であることが多く、この地域に分布することは既に認識されているといえてよいであろう。このようなことから、東京湾沿岸地域と古鬼怒湾の印旛沼周辺においては、遺跡の占地および貝層形成時の土地利用に違いが見られるが、一方で、マウンド状の高まりやドーナツ状の高まりについては、印旛沼沿岸地域と同様に存在するといった共通点が見られる。

（4）縄文時代中期における様相との比較（第11図）

古鬼怒湾沿岸地域における縄文時代中期の環状貝塚の状況を見ると、霞ヶ浦沿岸を中心に麻生町於下貝塚、玉造町若海貝塚など、第6形態の環状貝塚が目立つ。後晩期集落として取り上げた陸平貝塚も中期から継続して営まれている集落であり、この地域の特徴といえてよい。古鬼怒湾南岸地域においても、宝田山ノ越貝塚、木之内明神貝塚、白井大宮台貝塚、阿玉台貝塚など第5形態もしくは第6形態の環状貝塚が分布しており、霞ヶ浦沿岸との連続性が強く見られる。印旛沼沿岸にはこのような斜面に大規模な貝層を形成する遺跡は見られないが、少なくとも印旛沼と現利根川の合流部付近まではこのような遺跡が分布しており、後期とは様相を異にしている。

それに対し、東京湾沿岸においては、中期には、有吉北貝塚のような斜面に貝層を形成する貝塚は見ら



第11図 縄文時代中期における古鬼怒湾沿岸の環状貝塚の形態別分布

れるものの、都川水系中流域においては、荒屋敷貝塚に代表されるように第1形態の環状貝塚となる例が多い。このような状況を見ると、古鬼怒湾沿岸地域と東京湾沿岸地域の貝層形態のコントラストは明瞭で、どのような地形に集落を営むか、貝殻等の食料残滓の廃棄場を集落のどの場所に設けるかという土地利用の違いがここに現れていると考えられる。

4. 地形と貝層分布からみた古鬼怒湾沿岸の縄文時代後・晩期集落

(1) 古鬼怒湾沿岸における後・晩期集落の様相

これまで、当地域の縄文時代後晩期集落について、地形と貝層の関係を概観してきた。その結果を遺跡の分布図に反映したのが第10図である。

北岸地域と南岸地域を比較すると、印旛沼周辺地域及び古鬼怒湾奥南岸地域に分布する第2形態の環状貝塚は、ほとんどが点列環状貝塚であるのに対し、古鬼怒湾奥部北岸地域には比較的大規模な貝層が形成される点に大きな違いがある。また、印旛沼沿岸の第2形態の点列環状貝塚と荒海貝塚、古原貝塚を比較すると、前者がいずれも、凹地が開口する谷頭が明瞭であるなど、第2形態の典型的なありかたに近いのに対し、後者は、遺跡が面する谷と中央凹地や貝層分布の関係が明瞭ではない。これらは、台地上に貝層が分布し、環状貝塚に近い様相ではあるが、典型的な第1形態にも第2形態にも分類できない。今回は便宜的に谷頭と凹地との関係が不明瞭であることから、これらを「第1形態に類似する貝塚」と一括して呼称した。古鬼怒湾の対岸に位置する福田貝塚や、湾奥部の下ヶ戸貝塚、霞ヶ浦沿岸の安食平貝塚なども、それぞれ異なった貝層分布ではあるが、同様の傾向が見られることから、この仲間に分類した。

このようなことから、第2形態の典型的な点列環状貝塚の分布範囲は、印旛沼沿岸と、古鬼怒湾奥南岸湾奥部の一部に限定され、対岸の中妻貝塚などが分布する地域は、比較的大規模な貝層を持つ第2形態の環状貝塚が分布する地域として区分され、さらに両地域に隣接する東西の地域は、下ヶ戸貝塚や荒海貝塚、古原貝塚、福田貝塚といった、第1形態に類似する貝塚が分布している地域として区分することができる。

また貝層の立地から、台地上に貝層が形成されるタイプと、斜面に貝層が分布するタイプに分けた場合、前者のタイプは古鬼怒湾湾口部付近では減少し、清水堆遺跡のように小規模な地点貝層が形成される遺跡のみで、大規模な貝層が見られる大倉貝塚や良文貝塚は、ともに斜面に貝層が形成される。斜面に貝層が形成される遺跡は、霞ヶ浦南岸地域の上高津貝塚、陸平貝塚、椎塚貝塚などがあり、分布がベルト状に連続している。このようなことを見ると、斜面に大規模な貝層を形成する遺跡は、霞ヶ浦に分布の中心があり、その一端が古鬼怒湾南岸にも及んでいるように見られ、第2形態の点列環状貝塚を特徴とする印旛沼沿岸の文化圏と斜面貝塚が形成される霞ヶ浦沿岸の文化圏とが、霞ヶ浦開口部付近で接触しているととらえることができる。

しかしその一方で、霞ヶ浦沿岸には、台地上に比較的大きな貝層が形成される貝塚も分布しており、斜面貝層地帯として単純には括ることはできない。平三坊貝塚や安食平貝塚といった貝塚は、先にも述べたように、平面形が環状貝塚に近い形態となるが、凹地と谷などの関係から貝層の分布を見た場合、下総台地における分類では当てはまらないことから、これらも「第1形態に類似する貝塚」ととらえた。また麻生堀之内貝塚に見られるような、尾根筋や台地縁辺に貝層が分布する例も見られ、下総台地とは異なった

規則性が存在する可能性がある。

マウンド状の高まりについて見ると、現況で見える限りでは、印旛沼周辺の遺跡において顕著に認められ、古鬼怒湾沿岸の他の地域からは明確には観察されていない。また、この印旛沼沿岸地域内でも必ずしも全ての遺跡において確認されているわけではない。しかしこれらの高まりは、後世の削平や、自然の作用による流失も想定されるため、十分な検討も必要である。土器片が集中する地点（いわゆる土器塚的なもの）については、現時点で具体的な調査例は印旛沼南岸地域に限定されるが、土器片が多量に散布する地点は、今回取り上げた中でも興津貝塚などでも見られ、霞ヶ浦沿岸の貝塚においても多量の遺物が散布する遺跡が見られることから、分布はより広い範囲に広がることが予想される。

（2）東京湾沿岸地域からみた古鬼怒湾沿岸地域

前節までの分析結果を踏まえて、東京湾沿岸地域から古鬼怒湾地域に至る範囲の縄文時代後・晩期集落を概観すると次のようにグループ分けできる（第10図）。

- 1) 第1形態の環状貝塚を主とする都川水系中流域。
- 2) 第2形態の点列環状貝塚を主とする印旛沼南岸地域。
- 3) マウンド状の高まり、ドーナツ状の高まりを明瞭に持たない第2形態の点列環状貝塚が分布する印旛沼湾口部西岸。
- 4) 谷と凹地の関係が不明瞭な、第1形態に類似する貝塚が分布する古鬼怒湾湾央部の地域。
- 5) 霞ヶ浦南西岸地域から古鬼怒湾湾口付近に続く第4形態、第6形態といった斜面貝層を形成する地域。
- 6) 5) とクロスする、霞ヶ浦沿岸を中心とした、北総台地とは異なった尾根上に貝層が展開する地域。

また、以上のような後晩期におけるありかたは、東京湾沿岸地域においては、中期から後期へとひきつづき第1形態の環状貝塚が形成されるなど、ある程度の連続性が見て取れるのに対し、古鬼怒湾沿岸においては、霞ヶ浦を中心に広く分布した第5形態、第6形態といった斜面貝層を持つ貝塚が、後期以降には分布範囲を狭め、代わって台地上に貝層が形成される遺跡が増加するようになる。特に印旛沼沿岸においては、中期における貝層がほとんど見られないことから、第2形態の点列環状貝塚が形成されるのは、後期以降であるといえる。

これらのことを総合し、古鬼怒湾沿岸と東京湾東岸の中期から後・晩期の縄文集落における占地、貝層分布の形態の変化を見ると、中期には、古鬼怒湾沿岸と東京湾東岸地域が異なった形態パターンの文化圏を形成して、両地域の貝塚分布範囲には印旛沼を挟んで断絶が見られるとともに、関係は希薄であったのに対し、後期以降には両地域は貝塚の分布が連続するようになるとともに、貝塚形態も漸移的な変化を見せるようになるということがいえるであろう。

本論の最初に問題提議した、中央凹地と先導谷との関係、貝層、マウンド状の高まり、ドーナツ状の高まりとの関係が、古鬼怒湾沿岸地域においてどのような様相が見られるかという点に立ち戻ると、先導谷に環状貝塚が明瞭に開口するのは、今回分析を行った範囲では、後・晩期においては都川水系上流域から印旛沼沿岸地域、印旛沼湾口部およびその古鬼怒湾対岸地域に限定され、それ以外の地域においては、異なった形態の貝層分布を持つ遺跡が分布しているということを示すことができた。単純に先導谷奥部に形成された凹地を囲むように集落が展開するというのが、必ずしもこの時期の代表的な大規模集落の形態ではないだけでなく、地域によって多様な集落の形態が存在することが想定された。

5. おわりに

今回は、環状貝塚の形態分類を分析の中心に据えたため、環状貝塚を形成する遺跡についての分析が主となってしまい、貝層は小規模だが広く遺物が分布する古戸貝塚、馬場貝塚、あるいは貝層分布が環状とはならない台方花輪貝塚、石神台貝塚、戸ノ内貝塚など、この地域の縄文時代後晩期を考える上で重要な遺跡を結果として考察から省くこととなった。また分析対象とした遺跡を貝塚に限定したため、貝層を形成しない遺跡についても分析から省いた。また印旛沼沿岸には中期の環状集落も分布しており、これらも合わせて考えなければならない⁽¹⁾。

また、東京湾沿岸、古鬼怒湾北岸地域における貝塚の検討が不十分な状態で古鬼怒湾南岸地域との比較を行っているので、論旨が雑駁になってしまった感は否めない。特に村田川以南の遺跡や、汐田川以北、それから現江戸川流域を含む東葛地域の遺跡を検討に加える必要があることは言うまでもなく、今後これらを含めた分析を行うこととしたい。

それと同時に、遺跡の詳細な時期については触れずに論を進めたため、分析の時間軸としては大雑把なものとなった。以上のようなことを今後の課題としたい。

謝辞：本稿を起こすにあたり、小笠原永隆、小笠原敦子、佐藤誠、常松成人、日暮晃一、山田敏史各氏には、調査等で多大なる援助を頂いた。また、本論文は2004年7月に執筆・受理されたが、2004年9月に行われた、「シンポジウム 『井野長割遺跡を考える』」の内容を受けて変更を行った。シンポジウムに参加された阿部芳郎、江原英、小栗信一郎、小倉和重、堀越正行、田中大介各氏、それからシンポジウム運営に携わった内田理彦、猪股佳二、高橋誠各氏には、感謝の意を表したい。

なお本論文は、平成13年度日本学術振興会科学研究費補助金（奨励研究）によって行った研究成果の一部を使用して作成したものである。

註

(1) これらのことについてはすでに阿部 (2004), 佐倉市ほか (2004) など、問題定義がなされている。

参考文献

- 阿部芳郎 1996「縄文時代のムラと「盛土遺構」-盛土遺構の形成過程と家屋構造・居住形態-」『歴史手帖』24-8
- 阿部芳郎・君島論樹・芝原祐子・鈴木宏美・法量郷子・堀寛子・松丸信治 2004「縄文時代後期・晩期における谷奥型遺丘集落の研究-千葉県佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査方法を考える-」『駿台史学』122
- 茨城県 1979『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』
- 江原 英 1999a「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例-縄紋後・晩期集落の一形態を考える基礎作業-」『研究紀要』7 栃木県埋蔵文化財センター
- 江原 英 1999b「遺構研究 環状盛土遺構」『縄文時代』10
- 江原 英 2001「環状貝塚・環状盛土遺構」『第一回研究会発表要旨 縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 小栗信一郎 2000「三輪野山貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1』
- 小倉和重 2001「井野長割遺跡-縄文時代のスペースデザイン, 「煙管の秩序」-」『印旛郡市文化財センター第5回遺跡発表会発表要旨』
- 小川和博 1978「台方花輪貝塚-貝塚測量調査報告-」『成田市の文化財』第9集 成田市教育委員会
- 財団法人 印旛郡市文化財センター 2004『千葉県佐倉市井野長割遺跡 (第4次調査)』
- 財団法人 千葉県史料研究財団 2000『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』
- 佐倉市教育委員会・財団法人 印旛郡市文化財センター 2004『シンポジウム「井野長割遺跡を考える」~環状盛土をめぐる~』
- 佐藤 誠 2000「古鬼怒湾における貝塚の形態的特徴」『貝塚研究』5
- 佐藤 誠・日暮見一・吉野健一・山田敏史 2001「平三坊貝塚」『貝塚研究』6
- 滝口 宏編 1961「VI発掘調査報告, 7.天神台貝塚」『印旛手賀 印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』
- 千葉県教育委員会 1983『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』
- 土浦市教育委員会 1994『国指定史跡上高津貝塚A地点-史跡整備事業に伴う発掘調査報告書-』
- 常松成人 1999「新川流域の貝塚」『貝塚研究』4
- 常松成人 1997「千葉県八千代市神野貝塚研究の基礎的研究」『貝塚研究』2
- 西村正衛 1984a「千葉県佐原市大倉南貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究-貝塚を中心として-』
- 西村正衛 1984b「千葉県香取郡神崎町古原貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究-貝塚を中心として-』
- 西村正衛 1984c「千葉県成田市荒海貝塚 (第1・2次調査)」『石器時代における利根川下流域の研究-貝塚を中心として-』
- 堀越正行 1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』26
- 後藤和民 1985「馬蹄形貝塚の再吟味-東京湾東沿岸における縄文集落の一樣相について-」『論集日本原史』
- 日暮見一 1999「花見川流域に形成された貝塚の諸特徴」『貝塚研究』4
- 日暮見一・宍倉昭一郎 2004「千葉市の貝塚群」『有限責任中間法人日本考古学協会第70回総会研究発表要旨』
- 吉野健一 2002「三直貝塚の遺構分布と盛土遺構の断面」『研究連絡誌』65
- 吉野健一・宍倉昭一郎・日暮見一・佐藤誠・小笠原永隆・小笠原敦子・山田敏史 2002「麻生堀之内貝塚」『貝塚研究』7
- 山田敏史・日暮見一・吉野健一・小笠原永隆・常松成人・小笠原敦子・川口貴明 2003「興津貝塚」『貝塚研究』8